

Title	インド, アルナーチャル・プラデーシュのモンパに見る民族表象と伝統の変化の動態
Sub Title	
Author	脇田, 道子(Wakita, Michiko)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2011
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.72 (2011.) ,p.160- 162
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成22年度博士課程学生研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000072-0160

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

や運指によって解消し、〈身体感覚〉に根ざす純正な音程を再現することを考慮して作られているのである。フルートは古来、人間の声と同様、純正な音程を求めればそれが適う楽器であるため、発音方法を合理化する必要はなかったのである。図-1のド♯は、異名同音を採る現代のピアノではレ♭と同じ鍵盤を押さざるを得ないが、フルートの名手ならこの異なる二音を吹き分けることができる。現代のピアノではバッハが意図した異名異音は鳴らせないが、音程を微調整する余地を歌口に残して改良されたフルートなら、〈身体感覚〉(息)を駆使することにより作曲家の創意を表現することができるのである。フルートは、このように演奏面で〈身体感覚〉の側面を保ち現代にいたる楽器である。



図-1 J. S. Bach, [1966] 2008, 《2本のフルートと通奏低音のためのソナタ ト長調 BWV 1039》Presto, Flauto traverso I, 第76-8小節

文献

- Bach, Johann Sebastian, [1966] 2008, *Triosonate G-Dur für zwei Flöten und Basso continuo, BWV 1039*, Kassel: Bärenreiter.
- Boehm, Theobald, [1922] 1964, *The Flute and Flute Playing; in Acoustical, Technical, and Artistic Aspects*, Dayton C. Miller trans. and ed., New York: Dover.
- Brown, Rachel, 2002, *The Early Flute : A Practical Guide*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Powell, Ardal, 2002, *The Flute*, New Haven/London: Yale University Press.
- Sadie, Stanley ed., 1980, *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*. (= 1996, 柴田南雄・遠山一行総監修, 『ニューグローヴ世界音楽大事典 第15巻』講談社。)
- Toff, Nancy, 1979, *The Development of the Modern Flute*, New York: Taplinger. Reprinted in: 1986, Urbana/Chicago: University of Illinois Press. (= 1985, みつとみとしろう訳『フルートはいま——現代フルートのあゆみ』音楽之友社。)
- Weber, Max, [1921] 1956, "Die rationalen und soziologischen Grundlagen der Musik," *Wirtschaft und Gesellschaft: Grundriss der verstehenden Soziologie*, vierte, neu herausgegebene Auflage, besorgt von Johannes Winckelmann, Anhang, Tübingen: J.C.B.Mohr, 877-928. (= [1967] 2000, 安藤英治・池宮英才・角倉一朗訳解『音楽社会学』創文社。)

インド、アルナーチャル・プラデーシュのモンパに見る 民族表象と伝統の変化の動態

脇 田 道 子

1. 研究課題

本研究の目的は、インドの指定ドライブであるモンパ (Monpa) という民族集団を通して、近代的な国民国家の成立と国境の画定が国境地帯に住む人びとの伝統文化にどのような影響を与えてきたかということを明らかにすることである。そのアプローチのひとつとして、まずモンパの民族表象に着目し、その伝統の変化を動的にとらえるという方法を取っている。また、修士論文以来の課題のひとつとし

て、「モンパとは誰か」という点についての研究がある。チベットのラサから見て、ヒマラヤの蛮族の住む地を含意した「モンユル」に住む人びとの総称がモンパであるが、それが指定トライブとしてのモンパの呼称となっている。同じく州東部の指定トライブであるメンバ（Menba）とはどのような関係にあるのかについても明らかにすることを目指している。

2. 2010年度の研究概要

7月から9月にかけての2カ月間、アルナーチャル・プラデーシュでの調査を行った。そこで、タウンで3日間にわたり開催されたモンパ・セミナーに参加した。出席者は、西カメン県、タウン県出身のモンパで、その主たるテーマは、「モンパの伝統文化の再認識と持続」であった。

「慣習法と女性の地位」、「モンパの伝説」、「カラクタン・モンパの結婚システム」などのテーマによるさまざまな興味深い発表や討論がなされたが、中でも大きなテーマだったのは、チベット文字（ポータ文字）を使用することによって自分たちの文化を守ろうという提言だった。チベット語は、1950年代まで、チベットの行政官がこの地域を統治し、徴税していた時代に主に役人や僧侶によって使われてきたが、モンパの母語ではない。また、モンパには文字はなく、現地の学校教育はヒンドゥー語と英語で、チベット語の教育機関は少ない。

このセミナーを通じて、モンパの人びとが自らを「インドのトライブではあるが、文化的には仏教や伝統的な交易を通じてチベットや隣国ブータンとの関係が深い人びと」と定義していることがうかがえたが、それは同時に、隣接して住む非仏教徒のトライブとの「差異」を明確にすることも意味している。

実際には、指定トライブとしては「モンパ」として範疇化されている人びとも地域ごとに異なる言語を持ち、地理的条件による生業の違いなどもあり、一枚岩ではない。セミナー中にも、自らの地域の言語で話す質問者に対して、「ヒンディー語で話してくれ、なにを言っているかわからない」という野次が飛んでいた。この地域においては、ヒンディー語やアッサム語、そして英語がリングフランカである。なぜ今、文字が必要なのかという問題について分析中であるが、結論を出すためには、今後も聞き取り調査が必要である。

タウンには約1ヵ月滞り、1962年の中印国境紛争以前にチベットに塩を得るための交易に出かけていたモンパの老人たちを訪ねて話を聞いた。その多くは70歳から80歳代であるが、当時の地名をはじめとする旅の詳細をよく覚えていた。タウンのモンパにとっては、南のアッサムよりも北のチベットや東のブータンへ行く方がはるかに容易だったことが改めて確認できた。国境が鎖されてから、現在に至るまでのタウンの町や人びとの生活の変化を知ることができたことは大きな収穫であった。

調査期間の後半で、メンバの居住地である西シアン県のメンチュカを初めて訪ねて調査を行った。この調査によって、メンバとモンパとの共通点、相違点、そしてつながりがだいぶ明らかになってきた。東側の上シアン県のトゥーティンやゲリンもメンバの居住地であるため、そこでの調査も予定していたが、モンスーンによるがけ崩れのために橋が落ち、途中で引き返さざるを得なかった。その後、3週間近くわたって橋は修理されず、トゥーティン地区が完全に孤立してしまったことを後で聞いた。

その代わりに、州都イタナガルで、政治家や人権団体のリーダー、アルナーチャル・プラデーシュ学生ユニオン（AAPSU）の会員、公務員などにインタビューすることができた。これらの聞き取り調査を通じて、マクマホン・ラインとインナー・ライン（インド内郭線）に挟まれた州が抱える様々な問題に対する知識人の考えを聞くことができた。中印国境紛争以後も、国境地帯であることを理由として

いっこうに進まないインフラ整備が州の発展を妨げているが、それに対する不満は州単位ではなくトライブを単位として噴出する。蔑称から自称への公的なトライブ名称に関する申し立てなどがその具体的な例であるが、モンパの場合にも少数ではあるが、あいまいな民族名称に対する不満を口にする人たちがいる。しかし、これらの発言に関しては、公文書での裏付けと再確認が必要な内容も多く、再調査を行う必要がある。

その後、12月から1月にかけて2回目の調査を行い、再び上シアン県を目指した。今回は悪路のため車が壊れ、代替車を一昼夜待たなくてはならないというアクシデントがあったが、なんとか目的地に到着することができた。中国との国境であるマクマホン・ラインのすぐ近くであるため写真撮影など行動には制約もあったが、多くの貴重な情報を得ることができた。同じメンバとされている人たちであるが、西シアン県と上シアン県のメンバとの間には交渉はまったくなく、地理的な隔絶や隣接する周囲のトライブとの関係性の違いもあって、それぞれ独自の歴史を歩んできたことがわかってきた。チベットからの南下の歴史に関しては、メンバの口承伝説とチベット側の門巴族に関する中国の文献との照合を行っているが、まだその整合性を確認するには至っていない。

上シアン県での調査の後で、タウン県でタウン僧院のトルギャル祭について調査した。今年は1月2日から4日までの3日間であった。早朝5時半から夕方5時半ごろまで毎日僧院に通い、祭の詳細を取材した。仮面舞踏(チャム)を中心にした法要祭であるが、プログラムの内容だけでなく、この祭のために雪の山道を二日間歩いてやってきたブータン側の牧畜民プロクパのファミリーに出会い、取材できたことも収穫であった。そのうちの一组は、2006年にブータンのサクテンで調査した時に、筆者が乗った馬のオーナー一家だった。このファミリーとの再会は偶然のことであったが、決して意外なできごとではない。プロクパの信仰する仏教はブータン仏教の主流であるドゥックパ・カギユ派ではなく、タウンのモンパと同じゲルク派であり、プロクパもモンパも同じ衣服をその民族衣装としている。プロクパの人びとが、親和性を覚えるのは一般のブータンの人びとではなくモンパの方であるのはそのためである。プロクパとタウンのモンパの言語は異なるが、プロクパは、バターやチーズを売るためにしばしばタウンにやってくるため、モンパの言語を理解することができる。こうしたことをタウンで確認することができたのは初めてのことであったが、あらかじめプロクパの人びとがこの法要に来ることを予想し、期待していた結果でもあった。

3. 2011年度の目標

学位請求論文研究計画書提出後の今年度は、不足している研究内容を補足し、論文執筆の準備を盤石にしてゆくことを目標としている。文献調査に関しては、文化人類学における民族・トライブに関する諸理論、インドにおけるトライブ研究についての先行研究の分析を中心として行う。

夏と秋に予定している現地調査では、これまでの調査での疑問点について補足調査を行うが、具体的には、昨夏のモンパ・セミナーの発表者たちに会って、その発言の背景や意図について聞き取り調査する。また、AAPSUのリーダーやトライブごとに分かれた各支部のリーダーたちへのインタビューも数多く行ってゆく予定である。

また、つい先ごろのことであるが、4月30日に州の首席大臣であったドルジ・カンドゥ氏がヘリコプターの墜落事故で亡くなった。タウン出身のモンパであった氏の死が、モンパ社会にどのような影響を与えるのかという点についても観察してゆきたい。